

聖書：Ⅱペテロ 3：1～7

説教題：来臨の約束はどこに

日時：2018年4月22日（朝拝）

ペテロはこの第二の手紙で、イエス・キリストの再臨について、また最後のさばきの日が来ることについて語っています。果たしてそのようなことは現実にこの世界で起こることなのでしょうか。まじめに考えるべきことなのでしょうか。そのことは、この手紙が書かれた1世紀においても問題にされました。反対者たちは、そんなことは起こり得ないと言っていました。そんな中でペテロは、その日は来るのだ！ということはこの最終章でアピールしています。

まず1～2節では、この手紙を書く目的についてペテロは改めて述べています。1節：「愛する者たち、私はすでに二通目となる手紙を、あなたがたに書いています。これらの手紙により、私はあなたがたの記憶を呼び覚まして、純真な心を奮い立たせたいのです。」この手紙は第二の手紙だと言われています。第一の手紙とは聖書に収められているペテロの手紙第一なのか、それとも今日は失われている私たちが知らない手紙なのかは議論のあるところですが、しかし以前に見ましたように、この手紙はペテロが間もなく地上を去ることを意識しながら書いた手紙でした。言わば遺言的な書簡でした。彼は残されたわずかな貴重な時間を、この手紙を彼らに書くことのために用いています。ここにいかに読者たちに対するペテロの愛が示されていると言うべきでしょうか。彼は「あなたがたの純真な心を奮い立たせたい」と言っています。「純真な心」とは汚されていない心。ここでは偽教師たちの偽りの教えによって汚されていない、あるいは毒されていない彼らの状態を指していると思われます。その彼らの純真な心が奮い立たせられることをペテロは願っています。そのための方法は何でしょうか。それはこの手紙によって記憶を呼び覚まされるということです。ここに私たちに必要なのは新しい教えではないことが再び示されています。ペテロはすでに1章12～15節でも同じことを述べていました。1章12節に、私はすでにあなたがたが知り、堅く立っている真理を、いつもあなたがたに思い起こさせようと言っていました。また13節に、それによってあなたがたを奮い立たせることが私のなすべきことだと言っていました。そして15節にも、私が去った後いつでも、あなたがたがこれらのことを思い起こせるようにしておきたいと述べていました。私たちはつい新しい教えに惹かれやすいものです。すでに聞いたことのあるメッセージに接すると、あ～それは前に聞いたことがあると思って、

あまり関心を持たなくなる一方、耳新しいことには喜んで飛びついてしまう。しかしそうする人は偽教師に引っかかりやすい人と言えます。私たちが信じ、より頼むべき真理は、イエス・キリストにおいて決定的かつ最終的に示されました。これに付け加えるべき教えはありません。ですから今や私たちに必要なのは、イエス・キリストにおいて決定的かつ最終的に示された真理を思い起こし、そこに堅く立ち続けることです。そこに私たちを永遠に奮い立たせる力があります。

2 節に、その真理は「聖なる預言者たちにより、前もって語られた御言葉」、及び「あなたがたの使徒たちにより伝えられた主であり救い主である方の命令」とあります。前者は旧約聖書に記されている預言者たちの言葉、後者は新約時代の使徒たちによって語られたメッセージと言えます。ここに旧約と新約のメッセージは同一レベルのもので、一致・一貫していることが示されています。1 章 21 節ですでに述べられましたように、聖書の預言は聖霊に動かされた人たちが神からの言葉を語ったものです。どちらも同じ聖霊の導きのもとで与えられた御言葉ですから、それは一貫しています。その旧約の預言者たちのみことばと新約の使徒たちのメッセージに立ち返ることによって、私たちは自分の心を奮い立たせることができる。自分が生き生きとした信仰に生きるために必要なのは新しい、これまで聞いたことがないメッセージではないのです。むしろすでにこれまで聞いて来たメッセージを思い起こし、その記憶を呼び覚ますことによって、それができるのです。今日の私たちが言えば旧約聖書と新約聖書に繰り返し親しみ、これに良く聞くことを通して、その心を奮い立たせられ、正しい歩みへと導かれて行くことができるのです。

さて、こう述べたペテロは、まず第一に心得ておきなさいと述べて、3～4 節でこう語ります。「終わりの時に、嘲る者たちが現れて嘲り、自分たちの欲望に従いながら、こう言います。『彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。』」「終わりの時」とは、まさに歴史における終わりの時を指しますが、これはすでに始まっていることを聖書は述べています。ペテロは使徒の働き 2 章のペンテコステの日の説教でヨエル書を引用して、終わりの日に関する預言がここに成就し始めたと言いました。ですから今日の私たちは終わりの時に生きています。その終わりの時にあざける者どもがやって来ると言われています。ここに改めて確認することは、世界の歴史は時間が経つにつれてだんだん良くなるものではないということです。終わりに近づけば近づくほど、キリスト教の影響が広まって、世界

は素晴らしい状態に変わって行くというのではない。むしろ逆らう者、反対する者、あざける者たちの活動が現れて来る。イエス様も福音書の中で偽キリスト、偽預言者、人々を惑わす者らが現れて、多くの混乱や苦しみが生じると語っておられます。だからそのことに慌てないように！と警告されています。むしろこの聖書のメッセージに聞く時に、私たちは自分勝手な理想や期待とは違う現実と直面しても、かえって確信を持つことさえできるのです。

さて、そのあざける人たちは何と主張するのでしょうか。それは4節にある通り、「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。」ということです。そんな約束が実現しそうな雰囲気などどこにもないのではないのか！ということです。彼らがそう述べる根拠は、父たちが眠りについた後も、すべてが創造の初めからのままであるということです。この手紙が書かれた時は、イエス様が天に昇られてからすでに30年以上経過していました。紀元60年代半ば頃と思われます。イエス様が昇天される際、再び来られると約束された直後は、人々は今か今かと待っていたでしょうが、一向にそれは起こらない。もうその日は来ても良い頃ではないかと人々は待ち焦がれているのに、その日が来ない。その内に、その日を待たずして地上の生涯を終える信者たちも多く現れ始めていました。そんな中、反対者たちはあざけり始めていたのです。何も起こらないではないか。だいたいにして世界は昔から何も変わっていないと。そしてこの彼らの主張は、再臨に関する純粋な関心から出たものではなく、欲望に従う生活とセットであったことが3節に記されています。彼らが再臨を否定してあざけっていたのは欲望を満たす生活を肯定したいからです。さばきなどないと言って自堕落な生活を続けたいのです。あるいは自堕落な生活を続けたいから「再臨などないのだ！さばき来るなどと恐れる必要はないのだ！」と主張する。世界はこれまでも父たちが眠りについた時から、すなわち旧約時代の父祖たちが死んだ後も、ずっと続いたままである。今更さばきの日が来るなんておとぎ話のようなものでしかない！と。しかしペテロはこのように主張する人たちは次のことを見落としていると言います。自分たちの欲望に従う生活をしたいがために重要なことを見落としていると述べて、見落としてはならない大切な真理について語って行きます。そのポイントは、世界はこれまでずっと同じように続いて来たのではないということです。

まずペテロは5節で、「天は大昔からあり、地は神のことばによって、水から出て、水を通して成った」と言います。すなわち天地創造の出来事です。創世記1章に記され

ていますように、地は初め、水で覆われていましたが、水と区別されることによって、水から出ました。また「水を通して成った」という部分は、この世界は水という要素によって成り立っているということではないかと思えます。「万物の根源は水である」とかつての哲学者たちが述べた言葉も思い浮かんで来ます。確かに水はこの世界の成り立ちにおいて大きな役割を果たしました。しかしペテロはそれだけを述べているのではありません。ここに「神のことばによって」とも述べられています。確かに創世記1章の記事で主役を演じているのは神の言葉です。神が「光よ、あれ」と語られたことを通して、光ができました。大空と水を区別した時も、かわいた地が現れた時も、決定的な役割を果たしたのは神の言葉、あるいは神の意志でした。このことを押さえた上でペテロは6節でノアの大洪水のことを述べます。「そのみことばのゆえに、当時の世界は水におおわれて滅びました。」この部分は第3版と訳が変わっています。第3版は「当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました」となっていました。それが新改訳2017では「みことばによって滅びた」となっています。しかし結論から先に言えば、欄外の訳の方が適切であると思われます。欄外に「そのみことばと水を通して」とあります。ここの原文のギリシャ語は「それらを通して」という言葉になっています。「それら」とは何でしょうか。それは前の節の「御言葉」と「水」を指しているとするのが最も良いと信頼できる注解者たちは述べています。そうだとすると5~7節には完全な並行関係があることとなります。天地創造はみことばと水によってなされた。ノアの大洪水もみことばと水によってなされた。そして次に述べられる最後のさばきもみことばと火によってなされる。いずれにおいても注目すべき重要な要素は御言葉であるということです。そのことを頭の隅に置きつつ、6節にもう一度眼をやりたいと思います。偽教師たちは世界はこれまでずっと続いて来た不変の安定した世界なのだから、いまさら再臨など起こるはずがないと主張しました。しかしペテロは言います。この世界は水から出て、水を通して成り、水に支えられて存続して来たのに、その水が世界をさばく道具になった時がある。つまり世界はずっと安定して存続して来たのではない。世界を守って来たものが突然牙をむいて襲いかかり、さばきの使いになったことがある。それは自然法則がたまたま故障したということではない。そのために決定的な役割を果たしたのは神の御言葉です。言い換えれば自然法則よりも神の御心の方が上にある。その神の意志により、世界を守って来た水は世界を滅ぼした。とするなら同じようなことが再び起こったとしてもおかしくはありません。むしろこのことは、神が同じ方法で最終的なさばきを、この世界に来たらせるということを指し示すものとなっている。この重要なメッセージを彼らは見落としているとペテロは言うのです。

そうして彼は 7 節のことを語ります。「しかし、今ある天と地は、同じみことばによって、火で焼かれるために取っておかれ、不敬虔な者たちのさばきと滅びの日まで保たれているのです。」 将来のさばきでもカギを握っているのは「みことばによって」ということです。神ご自身の意志です。しかし今度、用いるものは「火」と言われています。神はノアの洪水後に、大水がこのように地を滅ぼすことはないと言われました。ですから水ではないのです。今度は火によるということが旧約聖書の多くの箇所で行われて来ました。たとえばマラキ書 4 章 1 節：「見よ、その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行う者は藁となる。迫り来るその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。——万軍の主は言われる——」。神はどのようにやがての日に、みことばにより、しかし今度は火を通して、不敬虔な者への究極的なさばきと滅びの日を来たせられる。偽教師たちの誤りは、神を頭から除外し、自然法則を絶対的なものと考えたことです。しかし事実は自然法則の上に神がおられるのです。そして神が良しとしたもうならば、それまで世界を支えて来た自然法則なるものをも自由に従わせることまでして、神は御心を行われます。そのことが過去の歴史の中にもはっきり例示されていることを、偽教師たちは欲望の生活を肯定したいがために、見落としていたのです。

そしてもう少し注意して読むなら、7 節が語っていることは何でしょうか。それはその御言葉の力が発揮されるのは、やがてのさばきの日だけではないということです。7 節が語っていることは、神はみことばによって今の天と地を、やがてのさばきの日に向かって取っておかれているということ、また保っておられるということです。この「取っておく」と訳されている言葉は、「貯える」とか「積み上げる」という意味の言葉です。また「保っている」という言葉は、その言葉の通り、継続的に保存するという意味でしょう。つまり神はやがてのさばきの日まで一旦お休みをしているのではなく、最後のさばきの日に向かって今の天と地を今日も保存し、たくわえておられるのです。その日のために今日も力強くこの世界を支え、保ち、取っておくという形でのみわぎを行なっているのです。この神のみわぎを見上げるなら、さばきなど来るはずがない！などとあざけている場合はありません。私たちは今日という日が特別な恵みの下にあることを覚えて、神の御心を受け止め、かの日に備える歩みへと駆り立てられなければならないのではないのでしょうか。

今日の御言葉から覚えたいこと、それは今日という日は何気なくやって来て、何気なく過ぎて行くものではないということです。この世界はただ機械的に物質的に動いているのではないということです。神は力強い御言葉によってこの世界を保っておられます。今日もこの世界を支えておられます。しかしただ支えているのではなく、最後のさばきの日に向かってたくわえておられるのです。この神の御手が今日の世界と私の上とにあることを見上げて、神を恐れ、礼拝する者でありますように。御言葉と水によってノアの時代の人々がさばかれたように、やがてみことばと火によって不敬虔な者たちがさばかれる日が来ます。そのことを見据えて、時のある間に、備える歩みをなす者でありたい。定めの時が来れば一気にそのことが世界に臨むことを覚えて、今日という日を生き、早くに悔い改め、救い主を信じ、この方の恵みと力を頂いて、やがて現れる義の国に入れていただく者の歩みへと進んで行きたいと思います。